幸彦さんが作成した高設栽培設備

栽培するいちごは主に業務用ですが、規格外のいちごもあり、どう活かすかを考え、フリーズドライやアイス用ジャムなど加工品の作成にも力を入れているそうです。

現在、土耕栽培を主に“夏秋いちご”を栽培していますが、いずれは、高設栽培に切替えることで、管理や収穫のし易さに加え、体への負担軽減を目指しているということです。

その他にも、自動巻き上げ換気装置や自動灌水装置を導入したりと、新たな試みに挑戦しています。

今後について、裕子さんは、「まず、地元の人に“夏秋いちご”の存在を知ってもらいたいです。食べる機会をなんらかの形で作りたいです。冬に栽培している“寒立菜”は以前、小学校で給食に使用していただき、食育を通して皆さんに知ってもらえたと思います。“夏秋いちご”も同じように皆さんに味わっていただけると嬉しいです」と目標を語ってくださいました。また、「現在は、農家として一杯いっぱいの状態ですが、いずれは第6次産業（第1次産業が食品加工・流通販売にも経営形態を表す）に進出し、農業レストランを経営し、人の雇用を生み出せるようになりたいです」と夢を語ってくださいました。

幸彦さんは、「自分たちを通して、若い人がいちご農家をやりたいと言って、農業者が増えてくれると嬉しいです」と思いを語ってくださいました。

裕子さんの祖父
藤澤豊勝さん（91歳）
裕子さんがいちご農家に挑戦するキッカケとなった方で、今も時々現場に出ているとっても元気で気さくな方です。

いちご摘み体験での１シーン